「不変と革新」世界で存在感

100年経営の会

100年経営の会（事務局＝日刊工業新聞社）は６月30日、東京・一ツ橋の如水会館で通常総会を開いた。2015年度の事業報告・収支報告をし、16年度の事業計画・予算などを審議・承認した。昨年度中部地区で行った第１回の「100年企業顕彰」を本年度は九州・沖縄地区で展開する。シンポジウム、勉強会など情報発信事業も引き続き拡大する。

通常総会開く

勉強会・情報発信を拡大

15年度のシンポジウムは、昨年10月に福岡市で開催した。ちょうど創立100周年を迎えた安川電機の津田純嗣会長兼社長が「安川電機の100年経営伝統と変革の歴史」として産業用ロボットをはじめさまざまな新しい事業に挑戦し、グローバルな展開を進めている同社の歴史と、経営理念を紹介した。このほか後藤俊夫日本経済大学経営学部長が「長寿企業大国にっぽんの秘密」と題して講演し、世界的な視野から見た日本の長寿企業の存在感を指摘。ファミリービジネスに代表される事業承継のあり方などを分析した。

新たに創設した「100年企業顕彰」は全国各地で順次展開するもので、第1弾として中部地区5県（愛知、岐阜、三重、富山、石川）に本社を置く創業100年以上の長寿企業を表彰した。審査のポイントは優れた経営理念を持ち雇用などの面で地域社会に貢献していること、本業の発展を追求するとともに不断の革新にも挑戦していること、など。中部経済産業局の後援を受け、自薦のほか日本貿易振興機構（ジェトロ）、各地域の金融機関などからの推薦を受けた企業の中から優秀企業を選考し、昨年12月に名古屋市内で贈賞式を開いた。

最優秀に当たる中部経済産業局長賞は、あいや（愛知県西尾市）に贈った。同社は古くから抹茶製造を続けてきたが、戦後新たな市場開拓のために食品原材料として抹茶を提案し、現在は世界中に抹茶を使った食文化を発信している。杉田芳男社長は「本業を離れろ」「本業を忘れるな」という一見異なった二つの家訓を例に挙げ、不変と革新の精神を披露した。このほか100年経営の会会長賞（岡本・ナベヤグループ、岡谷鋼機、井村屋グループ）、日刊工業新聞社賞（ウチキ、松本義肢製作所、イビデン、九鬼産業）、優良100年企業顕彰（15社）の合計23社を表彰した。贈賞式後は参加者一同であいや本社工場を見学、最新技術と伝統製法の長所を取り入れた製造現場を目の当たりにした。

表彰を受ける高橋健太郎ハイキャスト社長（左）

顕彰事業は、今後全国各地で順次開催し、各地域の優良長寿企業に光を当てる。本年度は九州経済産業局などの支援を受け、九州・沖縄地区で近く募集開始する。

このほか本年度の事業は引き続き、シンポジウム、少人数での勉強会などを開催し、情報発信を行う。顕彰事業の贈賞式は12月に福岡市内で予定。また、会員企業などの製造・サービスの現場を視察する見学会も実施し、会員間の交流促進などに役立てる。

また今回の通常総会に合わせて、当該年に創業100周年を迎える会員企業を表彰する「100年企業表彰」制度も新たに創設。今回は白鳥製薬（千葉市）、ハイキャスト（埼玉県羽生市）を表彰した。

総会審議終了後には、顕彰事業を実施する九州地区の会員企業を代表して、飯倉里美みょうばん湯の里（大分県別府市）社長が講演した。4月の震災後の復興への地元企業の取り組みなども交えて紹介した。

総会終了後は、100年経営の会顧問でさまざまな分野の評伝で知られる作家の北康利氏が記念講演を行った。ここからは同日に定時総会を開いた東京産業人クラブとの合同開催で、講演終了後の懇親会も130人あまりが参加した盛大なものとなった。

東京産業人クラブと合同の懇親会で交流を深めた

あいさつ

長寿企業の魂を守る

100年経営の会 会長　**北畑 隆生** 氏

災害や経済危機も乗り越えてきた長寿企業に学ぼうと当会が発足した。和魂洋才という言葉がある。今日本企業の多くはアングロサクソンの発想に沿ったコーポレートガバナンスに大慌てで取り組んでいる。しかし制度や手続きを整えるだけではうまくいかないこともある。長寿企業であるならば100年続いた理念、つまり企業の魂を守ることも大切。日本企業の魂と欧米から導入した制度がうまく融合して、立派な企業が育つのだろう。

試練も乗り越えて成長

日刊工業新聞社 社長　**井水 治博**

当会は2011年に発足して以来、100年以上の長きにわたり幾多の試練を乗り越えてきた長寿企業の経営の本質を探り、日本企業に数多く見られる長期持続的成長を目指す経営の良さの発信に取り組んできた。長寿企業の特徴の一つとして、良き伝統を受け継ぎながら、常に経営革新にも取り組む、いわば「伝統と革新」の精神が、企業風土として受け継がれている点がある。昨年100周年を迎えた当社もここから大いに学びたい。

先人に学ぶ生き残りの経営術　記念講演

100年経営の会 顧問
北 康利 氏

日本という国は長く続いているが、それは常にいろいろな意味での備えをしてきたからだと思う。また経済も国を守る上で重要な役割を背負っている。

今年は徳川家康が亡くなって400年。家康は関ヶ原の戦いで天下を取ったが、負けた側の毛利、島津にも領地を与えている。それどころかそれぞれの地での産業政策を任せている。こうした江戸幕府のように、日本人のすばらしい美徳は多様性を認める点。それが生き残りの経営術でもある。

聖徳太子にしても「和をもって尊しとなす」という言葉から分かるように、宗教上の争いの後も相手側を生かして使うことの重要性を知っていた。よく日本人は島国根性などと言われるがそんなことはない。海の向こうから来るものへの敬意、異なるものを受け入れる気持ちがあるのだ。

弘法大師が開いた高野山にしても、奥の院には川中島で戦った武田と上杉の墓がすぐ近くにあるし、浅野家と吉良家もそう。朝鮮の役の慰霊碑には亡くなった日本側だけでなく朝鮮の人たちへの慰霊の言葉も書かれている。敵と味方を分けるのではなく多様性を生かしていこうという日本人の考え方だ。

企業と接して感じることは、例えばパナソニックの皆さんには創業者あるいは会社の看板に泥を塗ってはいけないという思いがある。私は富士銀行に入った銀行員出身だが、やはり会社の看板を汚してはいけないと言われた。その上で、会社の歴史に自分のできることで新しい何かを付け加えるよう教わった。長い歴史に自分が努力して改善したことを加えられればそれは大きな誇りであり、感謝の気持ちも生まれる。こうした目に見えないものが企業の簿外資産となり、それを次世代につなげる。モラルや誇りは家庭の簿外資産、国家の簿外資産でもあり、積み重ねていくことが大切だ。

企業理念を横に置いても短期的にもうければよいという発想が最近はあるが、社会全体を考えれば生き続けることの方が絶対に大事だ。企業は本業を一生懸命やることがまず社会貢献になり、加えて雇用も生まれる。雇用の中からそれぞれが家族を持ち、子供たちが育ち、社会の構成員として戻ってくる。

企業が生き続けるためにはやはり見えない簿外資産を積んでいくことが大切だ。会社を愛する精神をもっと醸成する必要もある。白洲次郎が大切にした言葉の一つに「プリンシパル」があるが、それは美学や軸のことを指す。企業で言ったら経営理念だろうか。そうした軸をゆるがせにすべきではない。

見えない理念が企業の簿外資産

講演

震災からの復興を加速

みょうばん湯の里 社長　**飯倉 里美** 氏

大分・別府で湯の花を作っている。1725年の創業で私が16代目だ。4月の震災では製造施設「湯の花小屋」なども大きく損壊した。九州全体で観光客が激減し、当社も3万人分の来場キャンセルがあった。しかし290年続いてきた事業をこれで終わらせるわけにはいかない。今後国内外に情報発信する。近年日本各地で災害が相次ぎ各地の観光は大きな被害を受けている。日本には素晴らしい場所が本当にたくさんある。各地をぜひ訪れていただきたい。

100年経営の会

随時会員企業募集中
（入会資格は、創業60年以上）

100年経営の会　「閉塞感を打開する原動力に」

日本には創業100年以上の企業が2万社以上あります。

こうした長寿企業の多くは持続的な成長を目指す独自の経営理念を持ち、顧客や従業員、地域社会との結びつきを大切にしています。日刊工業新聞社は2011年に長寿企業に学ぶ「100年経営の会」を立ち上げました。本会の趣旨は多くの危機を乗り越えてきた経営を長寿経営として理論化し情報発信することです。
会員企業の歴史から長年培われた日本型経営の優れた点を探っております。

わが国の企業は、多くの経済危機や大規模な災害に見舞われながらも、これらを乗り越えて発展を続けてまいりました。

敗戦により壊滅的な打撃を被ったにもかかわらず、奇跡の復興を遂げ、世界第二位の経済大国になるなど、アジアの新興国のモデルとなる経済成長を実現してきました。その原動力となったのは、幾多の試練を乗り越えてきた創業100年を超える長寿企業であり、その経営手法を手本とした新興企業であります。

わが国には、創業100年以上の長寿企業が世界の半数を超える2万5000社以上もあるうえ、戦後に誕生した新興企業で創業60年を超える企業は、枚挙にいとまがありません。

これらの企業には、いくつかの共通点があります。長期的な経営視点をもち、良き伝統を大事にしながらも、環境の変化を先取りし、不断の革新を繰り返してきたこと、短期的な利益よりも長期的、持続的な企業の存続を基本とすること、何よりも顧客を大事にし、商品のブランドや企業のアイデンティティーを大切にすること、従業員を資産だと考え教育訓練や長期的な雇用を重視すること、株主だけでなく、顧客、従業員、地域社会などのステークホルダーにもバランスよく配慮することなどであります。これらは、「日本的経営」と称されることも多いのですが、欧米、アジアのエクセレントカンパニーにも共通するものです。

このような観点から経済産業省と日刊工業新聞社の御支援のもとに、2011年10月、「100年経営の会」を結成いたしました。長期的持続的な経営を新たな企業価値として体系化し、国内外に発信することを目的としております。

長期的持続的経営を実践し、それをめざす企業の交流の場として、経営の向上を図り、ひいては日本経済の新たな成長を実現する原動力となることをめざします。

100年経営の会 会長
（元経済産業省事務次官）
北畑 隆生

活動内容　「長寿経営の価値の普及活動」

1 勉強会の定期開催

長寿企業たりうるための経営手法などを理論的に分析するための勉強会を、アカデミズムとも連携しながら定期的に開催しています。会員企業をはじめとする長寿企業の経営者や研究者らを招き、創業時から現在まで引き継がれている精神（経営理念や哲学、あるいは家訓など）、経営環境変化に対応するためのイノベーション（経営革新や事業転換、技術面での挑戦など）、リスクマネジメント手法、事業継承、地域社会との関わりなどについて、さまざまな角度から見つめ、知的資産経営などをベースに経営論を構築します。一定の調査内容をまとめた段階で、日刊工業新聞紙上で研究成果を報道するほか、経営論としての公表を計画しています。

2 長寿経営の価値の普及活動

シンポジウム・フォーラムの開催

大型のシンポジウムを開催するほか、地方都市でも地方自治体や団体などと協働し、地域密着型のフォーラムを開催します。100年以上持続発展してきた企業から、創業の精神や理念の持続をはじめ、危機克服の経験、環境変化に対するイノベーションなどを学び合い、知的資産経営論をベースに長寿経営の魅力を広く発信します。

情報発信事業

ホームページの運用で、国内外へ長寿経営の価値を情報発信します。映像化などにも取り組み、ホームページなどでの情報運用を展開します。また、日刊工業新聞や電子媒体など日刊工業新聞社が有する各種媒体と連動した情報発信も積極的に行います。

3 長寿経営企業の顕彰事業

創業100年を超える長寿企業の優れた経営を顕彰します。国や各種機関の協力を得て、全国各地のさまざまな業種・規模の企業の経営理念や業績などを分析し、内外に発信します。

4 海外の長寿企業や団体などとの連携

海外の長寿企業の経営を調査・分析するほか、類似の団体との連携関係の構築を進めます。

5 工場見学会などの会員企業の訪問

各地の会員企業を訪問し、工場などを見学するほか、経営についてのディスカッションを行います。

「100年経営の会」に関するお問い合わせ・お申し込み先
日刊工業新聞社 100年経営の会事務局
〒103-8548 東京都中央区日本橋小網町 14-1（日刊工業新聞社内）
TEL 03-5644-7608
FAX 03-5644-7209
100年経営の会　検索